

## 研究ノート

## 鉄とその象徴性

## — 歴史人名学からの問いかけ —

宮 松 浩 憲

## I

我々は今、鉄の時代に生きている。そして、鉄の恩恵なくしては生活が成り立たないまでになっている。当然のこと、鉄は産業においてのみならず、文化、そしてここで問題にする心思の面でも人間に強い影響を与えてきた。

ヨーロッパでは石器時代が約200万年間続いたあと、1万2000年の青銅器時代をへて、紀元前5000年ごろから鉄器時代に入っている。小アジアのヒッタイト人が紀元前16世紀に鉄製武器と戦車をオリエントにもたらした<sup>1)</sup>。ここから、鉄の強さとしての象徴が生まれる。しかし、それは同時に大量の殺戮をつくり出すことになる。そのため、古代ギリシア人の間で「金の時代」、「銀の時代」、「青銅の時代」につづく世界の最後の最悪の時代としての「鉄の時代」の考えが作られ<sup>2)</sup>、またキリスト教の出現によって人類の墮落の時代としての「鉄の時代」の思想が生み出された<sup>3)</sup>。こうして、鉄には強さとしてと、それがもたらす最悪の結果としての2つの象徴性が付されるに至った。『金枝編』の著者は「タブーとされるもの」の章で鉄をその一つにあげ、その主たる原因に新奇さを優先させている<sup>4)</sup>。しかし、タブーとされるものとしてこの後、「鋭い武器」と「血」が続いていることから、新奇さよりもこれまでの素材にはなかった格段の殺傷能力、悪魔性

に原因があったと見るべきではなかろうか。

鉄という言葉は歴史上の重要な出来事との関係でよく使用されてきた。今回のイラク戦争復興計画の実施中に起きたテロ行為の殲滅作戦が「アイアン・ハンマー iron hammer」と呼ばれている<sup>5)</sup>。「鉄のカーテン the iron curtain」という有名な文句は、1946年3月5日英国首相チャーチルが演説のなかで、第二次世界大戦後、東西両陣営対立の下で、ソ連を中心とした東欧の共産主義国が西欧の自由主義諸国に対してとった政治的・秘密主義・閉鎖主義を指す言葉として最初に使用した<sup>6)</sup>。前者のアイアンには「容赦のない徹底した」、後者のそれには「重くて隙間のまったくない」の意が込められている。また、19世紀末のドイツ帝国宰相ビスマルクは兵器と兵力によって象徴される鉄血 (Blut und Eisen) 政策を行ったことで有名である<sup>7)</sup>。さらに最近では、「鉄の女 Iron Lady」と呼ばれた英国のサッチャー元首相も忘れることができない<sup>8)</sup>。このような形容詞としてのアイアン (またはアイゼン) の使用はこれ以外にもまだまだたくさんあるが、この使用法はいつ頃から行われるようになったのであろうか。また、鉄を使用する民族に共通してみられる現象なのであろうか。これから少し、ヨーロッパ人と日本人の間における鉄とその象徴性との関係について見ていくことにする。

## II

1644年7月2日ルーパト王子に率いられた王党派の軍隊とクロムウェルなどに率いられた議会派軍隊が北部イングランドの都市ヨークの西13 kmに広がる湿地帯マーストン・ムーア Marston Moor で対峙していた。なだらかな丘を背にした議会派軍に、水路を挟んで王党派軍が向き合っていた。前者は1万7千から8千の兵士からなる5つの部隊、後者も2万6千から7千の兵士からなる同じく5つの部隊からなっていて、兵力としては議会派が圧倒していたことになる。部

隊の構成を議会派對王党派の形式で見ると、東からフェアファックス卿指揮下の騎兵隊とゴーリング指揮下の騎兵隊、同卿指揮下の歩兵隊とニューキャッスル指揮下の歩兵隊、ベイリ指揮下の歩兵隊とポーター指揮下の歩兵隊、クロフォード指揮下の歩兵隊と王党派の歩兵隊、そして最も西にクロムウェルとレスリーが指揮する騎兵隊と戦闘開始後に駆けつけたルーパトの騎兵隊が対峙していた<sup>9)</sup>。実際、クロムウェルの軍指揮官としての名声はまだ確立されておらず、敵将ルーパトも戦いにおいて彼の隊と戦う位置に自分の部隊を配置していなかったと言われている<sup>10)</sup>。

このような敵味方の双方における騎兵と歩兵の構成は、武器・武具の専門書も明らかにしている如く、通常の構成であって、特殊なものでは決してなかった。そして騎兵は全員鉄でできた甲冑を身につけていたことも常識である。武器に関しても、中世からの剣と槍に加えて火縄銃が重要性を増すようになっていたことも敵味方に共通するものであった<sup>11)</sup>。

長い間我が国の教科書や参考書はすべて共通して、クロムウェルの軍隊を「鉄騎兵（隊）」と訳し、それにアイアンサイド Ironsides の語を当てている<sup>12)</sup>。つまり、敵と異なって、クロムウェルの騎兵隊は鉄の鎧甲を着て完全な防備が施されていたから勝利したとの印象を与える表現になっている。しかし、以上の戦闘の記述から、敵も味方も同じような装備の騎兵と歩兵からなっていたのである。従って、敵の騎兵も鉄騎兵であったのであり、クロムウェルの軍隊が勝利したのは、彼らだけが鉄の鎧甲で身を固めていたからではないことになる。同時代の王党派のウォーウィック卿はクロムウェルの軍隊、つまりアイアンサイドたちについて「はじめ、彼らは逃げるよりも死を選んだ。そうこうするうちに、危険の恐怖から解放された。それから高い報酬と余るほどの略奪品と昇級の喜びを味わうことで、こういった儲けの部分は彼らに利益を生来の敬神の賜と思わせるようにさせた」<sup>13)</sup>と書き記している。ここには装備といった物的な側面は出ていない。強調

されているのは精神的な側面、信仰に支えられた士気である。

それではアイアンサイドはこの規律、高い士気を指していたのであろうか。当時の記録によると、この言葉は軍隊に与えられたのではなくて、クロムウェルに与えられたもので、このことからアイアンサイドを「鉄騎兵」と訳すのは正しくないことが理解されよう。誰によって、どういう状況で与えられたのか。それは上記の戦闘の敗北後、敵将のルーパトがクロムウェルを指して言った言葉である。当時の新聞『メルクリウス・キヴィクス Mercurius Civicus』の9月19-26日付の記事には「月曜日、我々は陸軍中將クロムウェル — 彼はアイアンサイドと呼ばれているが、それはヨーク近郊での敗北のあとルーパト王子によって彼につけられた称号であるが — ……との情報をえた」<sup>14)</sup>とある。また、翌年王党軍が再び議会軍に敗北したネイズビの戦いの報告として、「アイアンサイド (=クロムウェル) が議会軍に合流しようとしているとのニュースが彼らに届いたので」<sup>15)</sup>とある。

クロムウェルはマーストン・ムーアの戦いで首に軽傷を負ったと言われており、彼は攻撃にあたって甲を被っていなかったことになる。彼は一瞬怯んだが、レスリーの予備軍が急行すると、両者は協力して軍隊を確実に前進させ、最後はそれまで不敗のルーパトの騎兵隊を蜘蛛の子を散らすように敗走させてのである<sup>16)</sup>。ある伝記作家は、この戦闘で戦況を好転させたのは馬に乗ったクロムウェルの波状攻撃であった<sup>17)</sup>とまで言っている。以上から、アイアンサイドのあだ名は、後述される中世のアイアンサイドの如く、鎧をまとっただけで先陣を切って敵と勇敢に戦ったクロムウェルにまず付けられ、それから彼が指揮する軍隊に付けられたのである。従って、クロムウェルの軍隊をアイアンサイドと呼ぶことは正しいとしても、それを「鉄騎兵」と訳すのは正しくない。さらに、この呼び名は、後述される如く、日本人の間に浸透した鉄の象徴性と合致していたため、長い間間違いが一人歩きする結果となってしまったのである。

このアイアンサイドは直訳すると「鉄の脇腹」となるが、ヨーロッパ人の間ではどのような共通認識があったのであろうか。その前に、現代ヨーロッパの言語がこの言葉にどのような意味を付しているのか見てみることにする。OEDでは第1義に「大いなる頑強さ *hardihood* または勇氣 *bravery* をもった人に付された異名」で、とくにイングランド王エドマンド2世とオリヴァー・クロムウェルに付されているとある。第2義には複数形としてクロムウェルの騎兵隊に付けられた呼称、第3義には甲鉄艦の意とある<sup>18)</sup>。その他の辞書もだいたいこれに倣っているが、「鉄の甲冑をつけていた」との原義を付した辞書もある<sup>19)</sup>。

ところで、アイアンサイドを「鉄騎兵」と訳すことは、イギリスにおける軍隊の歴史の流れにも反している。上記のマートン・ムアーの戦いのあと、1645年2月議会条例によって、クロムウェルの騎兵隊に範をとったニュー・モデル軍が創設される。そこで問題になっているのは、既述の如く、士気の強化を目的とした軍隊組織の抜本的改革であって、武器や武具についてはない。さらに、中世から発展してきた重装騎兵（胸甲重騎兵）は、その重量と嵩張り、それを支えるに十分な体力をもつ馬の調達の問題から、ニュー・モデル軍から排除されてしまっているのである。同時に、軽装槍騎兵も排除され、この新しい軍隊は銃を中心とする騎兵へと変身するが、この点からも鉄騎兵（隊）の訳は再考を迫られている<sup>20)</sup>。

北欧においてもこの言葉は使用されていた。まず、法書のタイトルとして使用されている。それは1271年ごろから約10年間にわたってアイスランドにおいて使用された、「ハコンの書 *Liber Haconis*」—それを公布したとされるノルウェー王ハコン4世（在位1217-63年）に因んで、17世紀から誤ってこう呼ばれている—とも呼ばれている *Járnsiða* がそれである<sup>21)</sup>。この言葉は英語のアイアンサイドに置き換えられるのであるが、この名前は何に由来するのか。19世紀のこの法書の編者はその由来を、この法書の中身と関連させて、記載された罰金の高額さと徴収の厳しさと、征服されて押しつけられた法律であることに求めている<sup>22)</sup>。し

かし、最近の研究者はこの法書がアイスランドに持ち込まれたとき、鉄の表紙がつけられていたことからこの名前が来ていると考え、名前と法書の中身との間に関連性を見ようとはしていない<sup>23)</sup> 従って、後者の立場に立った場合、鉄の象徴性とはまったく関係ないことになる。

さらに、これが北欧一帯であだ名としても使用されていたことが確認される。まず最初は、800年の前後に活躍した、デンマーク王トロブロクの息子、ウプサラ王ビオルン1世にこのあだ名 *Costea-Ferrea* が付されている。そして同王のあだ名はアイスランドでも広く知られていて、いくつかのサガのなかでアイアンサイドのアイスランド語訳 *járnsiða* が当てられている<sup>24)</sup>。12世紀後半のスヴェン・アゲセンは『デンマーク史』のなかで、あだ名の由来を「剛勇としての名声のため」<sup>25)</sup> としている。他方、イングランドのオルデリク・ヴィタリスによると、同王は「諸民族を殲滅すべく抜刀し、養育係りのヘイスティングズと一緒に大勢の若き兵士を従えて突進した。激しい疾風の如く、海からフランスの海岸に突如上陸し、城や町を諸聖者の修道院と共に瞬く間に焼き尽くした」<sup>26)</sup> と伝えている。これによって彼の勇敢さが十分に証明されているのであるが、あだ名と勇敢さとの関係が不明のままである。

ビオルン1世から遅れること約200年、このあだ名が付けられた有名な人物としてよく取り上げられるのがイングランド王エドマンド2世（在位 c. 988-1016）である<sup>27)</sup>。ロンドンの司祭であったラルフ・ド・リケット（1202年没）は『簡約年代記』のなかで同王に *Ferreum Latus* のあだ名を付しているが、その由来には触れていない<sup>28)</sup>。時代を上るに従って、あだ名の由来が明確になってくる。ハンティンドン<sup>29)</sup>の助祭長であったヘンリ（1160年没）は『イングランド人の歴史』のなかで同王に *Ireneside* のあだ名を付し、それを *Ferreum latus* と言い換え、その由来を「彼は戦争において最高の力 *vigor* と驚くべき忍耐力 *patientia* を発揮していたので」<sup>29)</sup> と説明している。さらに、9世紀末から書き始められ遅くと

も12世紀初頭までには完成していたと考えられる『アングロ・サクソン年代記』では、1057年の記述のなかにアングロ・サクソン語で「王エドモンドはその俊敏さ snellscipe ゆえにアイアンサイドと呼ばれていた」<sup>30)</sup>とある。これら2つの記述から、このあだ名が戦争と関係していたことが分かるが、鉄との関係が解明されたとは言い難い。アイアンサイドを「鉄の鎧」と解釈すれば、それは重い鎧を着て長時間戦う能力を強調するヘンリの説明とは一致するが、上記のビオルン1世の「激しい疾風の如く」と共通する、俊敏さを前面に押し出した年代記の記述とは対立することになる。この王はどっしりと構えて戦うタイプであったのか、それとも馬術にすぐれて敵陣に素早く切り込んでいくタイプであったのか。

この時代の戦闘の場面、武器と武具が詳細に描かれたものとして有名なのが、1082年までには完成されていたと考えられている「バイユのタピスリ」である<sup>31)</sup>。これはフランスのノルマンディ公ギヨーム（後の征服王ウィリアム）のイングランド征服（1066年）のエピソードが刺繍された壁掛けであるが、ノルマンディ軍とイングランド軍との間で、双方の大將を含めて装備や武器に大きな違いはない。馬に乗った騎士は頭を先の尖った甲で覆い、体は首の後ろから膝または足首まで鎖帷子によって保護されていた。利き手には剣か長槍を持ち、残りの手には長円型の盾が握られていた。ここには鉄板の鎧を着た人物は一人も登場しない。鎖帷子の胸の部分に方形の刺繍が施されているが、それが鉄の板を意味したのか否かについてはまだよく分かっていない。甲は同時代の発掘から、一枚または複数枚の薄い鉄で作られていたと考えられる<sup>32)</sup>。描かれた死体は槍が刺さったものや首を刎ねられたものが多く、脇腹を切られたものは確認できないが、これは描写方法の問題に過ぎなかったのであろうか。

11世紀後半のフランス、モンフォール城主家にアモリ3世がいた。彼はその勇気から「強者 Fortis」のあだ名がつけられて、その大胆さと誇りの高さによって周囲の人々に恐れられていたのであるが、その最期についてオルデリク・ヴィ

タリスは「彼は怒った獅子のごとくブルティユ領主ギヨームの領地に突入し、一人で二人の騎士との戦いに挑んだが、その一人に槍で脇腹 in latere を刺されて、その日のうちに息絶えた」<sup>33)</sup>と伝えている。また文学作品においても、「ティボー殿は白刃の身に迫るを見て、南無三と体を低くしたため、剣は流れて空を切った。・・・ティボー殿は猿臂を伸ばして相手の剣をつかみ、これを賊から奪い取って、残る三人のなかに躍り込み、そのひとりの胴を斬って殺し、とって返してはまた斬り込み、先頭に立っていた男の胴を斬って、これを殺した」<sup>34)</sup>や「そう言いながら、抜き身の剣を持ち構え、騎士の胴に斬りかかった」<sup>35)</sup>とある。さらに、中世の武勲詩でも、脇腹を槍や剣で刺されたりする場面が何度も描かれている如く、何にも防御されていない脇腹が最大の弱点であったようである。技によってか防御物によってかは知らないが、エドモンド2世はどのような状況にあっても、脇腹を切られるか刺されたことがなかったことから、このあだ名が付けられてのではなかろうか。その場合、俊敏さが大きな武器になりえたことは言うまでもない。

他方、「鉄の腕 Ferrebrachia」とあだ名される男もいた。10世紀後半のポワトゥ伯ギヨーム2世、11世紀後半にイタリアで活躍したロベール・ギスカールの兄、ギヨームなどがそうである<sup>36)</sup>。後者に関して、プーリアのウィリアムは『ノルマン事績録』のなかで、「彼は強かったので、<鉄の腕をもっている>と言われた。つまり、彼は強靱な力と精神をもっていた」<sup>37)</sup>と述べている。また、中世のフランスにおいて「鉄の足 Pedferre」とあだ名される男と出会うが、鉄の義足をつけていたというよりも、健脚の持ち主であったことを意味していたと思われる<sup>38)</sup>。「鉄の頭 Caput de ferro」とあだ名される男は鉄でできた頭を持っていたのでないことは言うまでもない<sup>39)</sup>。この象徴的な意味としての鉄の使用と好対照をなすのが次の例である。それはドイツ西部の大学都市ハイデルベルクの東37キロ、ネッカー川沿いのフロンベルク城主ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン Götz von Berlichingen (1480-1562年)で、彼は「鉄の手 Eisern Hand」とあだ名されてい

た。ゲーテは若いとき彼を主人公に戯曲を書いており、フランスのサルトルも『悪魔と神 le Diable et le Bon Dieu』のなかで彼を登場させている。このゲッツは若いときから盗賊まがいの領主や傭兵隊長として有名を馳せ、24歳のときにラントスハターの戦い Landshater Krieg で右手を失ってしまう。しかしその後も鉄の義手をつけて数々の戦闘に参加し、そのためこのあだ名がつけられたとのことである<sup>40</sup>。今日広大な葡萄畑の中心に位置するこの城はホテル、レストランとして大勢の観光客を引きつけているが、その博物館にはこの義手が甲冑とともに保管・陳列されている。もちろん、この場合のあだ名は、勇敢さも少なくなかったであろうが、その鉄製の義手と深く関係していたことは言うまでもない。

しかし、よく考えてみると、鉄製の甲冑と勇敢さとは両立する性格のものではない。強固に武装されている場合、それだけで完全に防護されており、武術の優秀さが第一に問題にされることはない。鉄製の甲冑とは本来の弱さを補強するためのものとしてしか考えられない。勇敢さは、他の兵士と変わらぬ装備のもとで、最高に発揮されるものである。従って、アイアンサイドの場合、実際に鉄製の甲冑を装着していることを意味するものではなくて、比喩として、つまり「まるで全身を鉄製の甲冑で包んでいるように不死身の」という意味で使用されていると考えたほうがよいのではなかろうか。

以上から、あだ名のアイアンサイドの由来に関して、全身を鉄製の甲冑で守られていたためとする通説に対して、馬と武器の扱いが俊敏であったとする新説が提示されたことになる。両説は対立する性質のもので、両立させることは困難である。両方とも欠点をもっていて、通説にとってはこのような早い時期における鉄製の甲冑の存在が立証されていないこと、新説にとっては鉄との関連性が希薄になっていることがそれである。ただし、鉄製の甲冑ではなくて、この時期主流であった鎖帷子で全身を被っていたするならば、両説は対立しない。しかし、この時代全身を鎖帷子で被うことは大将のみの特権ではなかったのである。ともあ

れ、近世以降、クロムウエルの例が示す如く、鉄製の甲冑とは関係なく、このあだ名が使用されていることは既述の通りである。話はとぶが、アメリカで1967年から10年近く、そして我が国でも69年から放映され人気のテレビドラマに『鬼警部アイアンサイド』がある。それは犯人の銃撃によって下半身麻痺に陥った警部が車椅子に乗って部下とともに難事件を解決する物語で、主演のレイモンド・バーの好演もあって欠かさず観ていたことを覚えている<sup>41)</sup>。原題は実在した警官の名前から取った「アイアンサイド Ironside」で、外観からは鉄との関連性を見つけだすことは難しい。しかし、この表題だけでアメリカ人には十分であったに違いない。従って、あだ名としてのアイアンサイドは非常に早い時期から武器や武具との直接的関係は薄れてしまい、強い騎士を表す表現として使用されるようになっていたと考えることができるのではなかろうか。

### III

我が国でもこの鉄の象徴性が確認される。しかしその場合、幾つかの国語辞典<sup>42)</sup>によるならば、古来からあったと言うよりも、明治時代に作られてと言えよう。鉄を含んだ熟語「鉄則」、「鉄心」、「鉄拳」、「鉄腕」、「鉄案」、「鉄脚」などの典拠は明治時代以降、「鉄人」はさらに新しい。この中で中国の古典に発しているのは「鉄壁」だけで、それは宋代の僧曉蛩、徐積、明代の揚維楨の作品で使用されている。例えば、徐積は「金城不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>破、鉄壁不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>奪」、揚維楨は「花凝<sub>二</sub>鉄壁<sub>一</sub>堅、木根山谷冷」と歌っていて、『新訂大言海』は原義として「鉄板を張った壁」を掲げ、「甚だ堅固な城壁」という第二義が続いている。中国においても、上記の時代には、鉄壁の意味は第二義へと移行していたのではなかろうか。また、スポーツのトライアスロンの普及によって、アイアンマン・レースの訳である「鉄人レース」という名称が定着しようとしている。

黒岩涙香の『正史実歴 鉄仮面』の連載が始まったのは明治25年12月22日からである<sup>43)</sup>。その後も久生十蘭、大佛次郎などによって『鉄仮面』の名訳が出版されている<sup>44)</sup>。しかしこの場合は、タイトルが与えるイメージと物語の内容とは一致しない。この小説にはモデルがいたと言われている。ルイ14世治下（1698年9月18日）、流刑地として有名なサント・マルグリット島の長官ド・サン・マール殿がバステューユ牢獄の長官として来任するさい、一人の囚人を同伴していた。この囚人の顔には黒いビロードの面が被せられ、その素性を知るものも誰もいなかった。それまでこの囚人は上記の島の地下牢に17年間も幽閉されていて、その間も面を脱ぐことが国王によって厳禁されていた。1703年にこの囚人は死ぬが、その間いろいろな噂が立った。それらの共通点は獄吏はこの囚人をまるで王族のように扱い、上記の長官も話すときは脱帽していたことに加えて、その顔は時の国王と瓜二つであったということである。まず、ヴォルテールが『ルイ14世の時代』で黒ビロードを鉄仮面に変えて、この囚人の正体を暴こうとした。涙香の『鉄仮面』や十蘭の『真説・鉄仮面』の原著となったのは探偵小説家ポアゴベいの『ド・サン・マルス殿の2羽のつぐみ Les Deux Merles de Monsieur de Saint-Mars』（Paris, 1878）で、作者は主人公が前王のご落胤であることが公になることを怖れた、偽の現国王が顔に強制的に鉄仮面をつけさせ彼を長い間幽閉したとの推理にたち、国内外の陰謀によるこの鉄仮面の分捕り合戦を手に汗握るような物語に仕上げている。大佛次郎の『鉄仮面』もアレクサンドル・デュマの『ブラゼロヌ子爵』の後半部分の邦訳であり、ユゴーもこの囚人を主人公にした未刊の戯曲を残しているが、その題名は『双生児 Les jumeaux』となっている<sup>45)</sup>。このように、邦訳の原本となったフランス語版の表題では「鉄仮面」の文字は使用されていないことが分かったのであるが、どうして邦訳者は共通して『鉄仮面』の表題を選んだのであろうか。筆者が思うに、彼らは「鉄仮面」が日本の読者に与える衝撃を読みとっていたに違いない。但し、この場合は、日本人が鉄に対し

て抱く強さの象徴性と合致するものではないが。

昭和に入ってからでも、『鉄腕アトム』や『鉄人28号』といった漫画やアニメが大いに人気を博した。後者の原題は『鋼鉄人28号』であったので、鋼鉄から作られていたと考えられるが、前者に関しては、手塚治虫は自身でアトムの体の素材をプラスチックと明記しているにも拘わらず、この表題を採用したのである<sup>46)</sup>。従って、『鉄腕アトム』の表題はアトムの腕や体の素材とは関係なく、無敵を表すためにつけた名前であったことになる。また、1959年には元プロ野球選手の稲尾和久が主人公の映画『鉄腕投手稲尾物語』が制作されている<sup>47)</sup>。その前年西鉄ライオンズの弱冠21歳の投手であった主人公は日本シリーズで読売ジャイアンツに3連敗したあと奇蹟の4連勝をして、日本一になる立役者となった。「神様、仏様、稲尾様」という文句が新聞の紙面に踊っていたのを記憶している。この場合も、稲尾和久の右腕が鉄でできていたのではなかったことは言うまでもない。

しかし、明治以降なぜ日本人はこのように鉄という言葉を含んだ表現を好んで使用するようになったのであろうか。また、中国史の専門家によると、このような強さを鉄で言い換える表現方法は中国ではあまり普及しなかったとのことである。そうすると、このような言い回しは近代以降の日本人に特有のもの、固有の心思であったことになる。

#### IV

以上、鉄の恩恵を受けている民族は、大なり小なり、心思においてもその影響を強く受けていた。しかし、表現の分野においては、かなりの温度差が確認される。

「アイアンサイド」に代表される鉄の語を用いた表現の根拠として、使用して

いる素材との関係からと、素材としての鉄とは直接的関係を欠いて、強さを象徴するための2つが考えられる。そして後者の場合、その強さが武器・武具における鉄の使用に由来していたのか否かが問題となった。非常に早くは強さは鉄の使用と直接的に関係していたであろうが、中世においてはすでに鉄は素材としてのものから分離し、抽象化されて、強さの象徴となっていたと推量される。つまり、中世以降、鉄は素材とは無関係に、強さの象徴として表現されるようになっていたということである。

我が国においても、少なくとも明治以降は、鉄は素材から分離して、強さの象徴として定着する。しかし、それ以前において、日本人と鉄の関係はどうなっていたのであろうか。また、近隣諸国における事情はどうであったのか。このように、鉄にまつわる疑問は尽きないが、それらについては稿を改めて考察することにする。

## 〔註〕

- 1) *Grand Larousse Encyclopédique*, t. 4, l'article "fer".
- 2) *Hesiod and the Homeric Hymns*, p.10-16, ed./transl. White(E. G. E.), Cambridge/London, 1982 (LCLG, 57)
- 3) 『ダニエル書』2。
- 4) J.G. Frazer, *The Golden Bough. A Study in Magic and Religion*, London, 1974, p.294-03 (『金枝篇』永橋卓介訳, 岩波書店 1951年, 2巻, 153-8頁)
- 5) Fox News, Thursday, November 13, 2003.
- 6) *Winston S. Churchill: his complete speeches, 1897-1963*, ed. R.R. James, 8 vol., New York, 1974, vol. 7, p.7290.
- 7) *Die Grossen Deutschen. Deutsche Biographie*, ed. H. Heimpe/Th. Heuss/B. Reifenberg, 5 vol., Berlin, 1966, vol., 3, p. 485.
- 8) K.Harris, *Thatcher*, London, 1988, p.80 (『マーガレット・サッチャー』大空博訳 読売新聞社 1991年 128頁)
- 9) S.R. Gardiner, *History of the Great Civil War, 1642-1649*, 4 vol., London, 1987, vol., 1, p.375. 但し, *Memoirs of Prince Rupert, and the*

- Cavaliers*, ed. E. Warburton, 3 vol., London, 1849, vol., 2, p.455ではこの配置が少し異なっている。
- 10) *Memoires of Prince Rupert, and the Cavaliers*, vol. 2, p.454. 但し, ガーディナーは異なる見解を発表している。Cf. S. R. Gardiner, *History of the Great Civil War, 1642-1649*, vol., 1, p.376.
  - 11) Mann, J. G., *Wallace Collection Catalogues. European Arms and Armour with short descriptions, historical and critical notes and numerous illustrations*, 2 vol. and supplement, London, 1924-1945. このテーマの邦語文献としては, 三浦権利『図説西洋甲冑武器事典』(柏書房 2000年)がある。これは非常に便利な参考書ではあるが出典がなく, 使用にさいしては注意が必要となろう。
  - 12) ほとんどの教科書と参考書がこれに該当するので, ここに挙げることを割愛する。
  - 13) *Memoirs of Prince Rupert, and the Cavaliers*, vol., 1, p.375.
  - 14) *Mercurius Civicus*, 19-26 Sept.1644 (*Old English Dictionary*, p.483). この新聞のマイクロフィルムとしては Gale 社の Primary Sources Microfilm, *Early English Newspapers* のそれが有名であるが, この記事はそこには収録されていない。結局, イギリスで手に入れることができず, ノースカロライナ大学までやってきたが, ここでも見つけることができなかった。
  - 15) *Relation of Victory on Naseby Field*, in *English Historical Review*, vol. 17 (1899)(*Old English Dictionary*, p.483)
  - 16) S. R. Gardiner, *History of the Great Civil War*, vol., 1, p.378.
  - 17) Ch.Hill, *God's Englishman. Oliver Cromwell and the English Revolution*, London, 1970, p.77.
  - 18) *Old English Dictionary*, p.483.
  - 19) 『英語語源辞典』(寺澤芳雄編 研究社 1999年), 738頁。但し, その出典の記載はない。
  - 20) C.H.Firth, *Cromwell's Army*, London, 1992, p.110-44.
  - 21) Halldór Hermannsson, *The Ancient Laws of Norway and Iceland, in Islandica. An Annual relating to Iceland and the Fiske Icelandic Collection in Cornell University Library*, vol. IV, 1922, p.20.
  - 22) *Járnsida edr Hákonarbók. Codex.juris islandorum antiquus, qui nominatur Jarnsida seu Liber Haconis*, ed. Th. Sveinbjornsson, Kobenhavn, 1847, p.VI.
  - 23) 前出註 21) 参照。
  - 24) *Landnámabók, I-III: Hauksbók, Sturlubók, Melabók*, ed. Det Kongelige nordiske oldskrift-selskab, Kobenhavn,1900, p.68, 190.

- 25) Sven Aggesen, *Brevis historia regum Dacia*, chap. 7. 《ob eximiae strenuitatis claritatem》
- 26) Ordericus Vitalis, *Ecclesiasticae historiae libri tredecim*, tome II, p.6.
- 27) *The Dictionary of National Biography*, vol., 6, p.403-405.
- 28) *Radulfi de Diceto decani Lundoniensis opera historica*, ed. W. Stubbs, 2 vol., London, 1876, vol. 1, p.169, 192, 237 (*Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, vol. 68)
- 29) Henry, archdeacon of Huntingdon, *The History of the English*, ed. Th. Arnold, London, 1879, p.182 (*Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, vol.74)
- 30) *The Anglo-saxon Chronicle*, ed. and transl. B. Thorpe, London, 1861, p.328 (*Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*, vol. 1) この語の意味に関しては, cf. *An Anglo-saxon Dictionary*, ed. J. Bosworth and T. Northcote Toller, Oxford, p.891
- 31) *La Tapisserie de Bayeux*, ed. D. M. Wilson, Antwerpen, 1985.
- 32) *Ibid.*, p.240-248.
- 33) Ordericus Vitalis, *Ecclesiasticae historiae*, tome III, p.333.
- 34) 『愛と笑いと』(新倉俊一他訳, 白水社, 1991年, 『フランス中世文学集』3), 34頁。
- 35) 同上, 44頁。
- 36) ギヨーム2世にこのあだ名を最初に付した人物の一人にJ. ベリが挙げられるが, 残念ながら出典があがっていない。Cf. J. Besly, *Histoire des comtes de Poictou et ducs de Guyenne*, Pairs, 1647, p.51; Guillaume de Pouille, *Gesta Roberti Wiscardi*, ed. R. Williams, *MGH, SS*, vol. IX, p.252.
- 37) *Gesta Roberti Wiscardi*, p.252. 《Is quia fortis erat, est ferrea dictus habere Brachia, nam validas vires animumque gerebat》
- 38) *Cartulaire de Marmoutier pour le Vendômois*, ed. M. de Trémault, Paris/Vendôme, 1893, p.320. Cf. M.-Th. Morlet, *Dictionnaire étymologique des noms de famille*, Paris, 1991, p.784.
- 39) *Cartulaire de Marmoutier pour le Dunois*, ed. E. Mabile, Châteaudun, 1874, p.101, 128.
- 40) *Neue deutsche Biographie*, Bd. 2, Berlin, 1953, p.98.
- 41) 『テレビ40年 in TVガイド』(東京ニュース通信社 1991年), 105頁参照。
- 42) 『新訂大言海』(富山房 1979年), 『日本国語大辞典』(小学館 2000-2002年), 『大漢和辞典字』(東洋学術研究書編 大修館書店 1990年)
- 43) 『黒岩涙香集』(木村毅編, 『明治文学全集』47, 筑摩書房, 昭和46年)
- 44) 『久生十蘭全集』V (大佛次郎他編, 三一書房, 1970年)

- 45) V. Hugo, *Les jumeaux*, in Id., *Œuvres complètes*, Paris, 1985, *Théâtre* II, p.603-686. ここでは史実通りに「黒ビロードの面 masque de velours noir」に戻っている。
- 46) 『図説鉄腕アトム』(河出書房新社 2003年), 39-40頁; 『鉄人28号』(光文社 復刻版) このテーマに関しては, 手塚プロダクションの田崎陽大氏に大変お世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。
- 47) 『日本映画作品辞典』(日本映画史研究会編 科学書院 1998年), 戦後編 I, 2112 頁参照。